

徳島の石棒

中村 豊 (徳島大学)

2021. 10. 30

(徳島市立考古資料館「石棒って何だ」)

はじめに

石棒は、縄文時代前期後半には出現し、縄文時代中期に中部・関東地方を中心とする東日本で、土偶とともに大いに盛行した。縄文時代中期は、東日本諸地域で遺跡の数が、縄文時代を通じて最多となる時代である。その最盛期に呪術具として広く普及していったアイテムのひとつが石棒であった。

石棒の用途ははっきりとはわかっていない。男性器をかたどっていることから豊穡と再生をねがったとも、祖先崇拝に用いられたともいわれている。縄文時代後期中葉から晩期前半のものは、刀剣を模したのもあって、模擬戦に用いられたという説もある。大型と小型(刀剣形を含む)で、屋内と野外の使い分けがあったともいわれている。多様な意見があり、現時点では実用品ではなく、儀礼や祭祀にもちいられたというところまでしかわからない。

今回は、西日本への伝播と展開、終焉についてかんがえるなかで、可能な限り石棒の実態に迫ってみたいと思う。なお、四国だけでは資料が不足することがあるので、中国地方や近畿地方の資料を援用することがある。

1. 西日本の石棒

石棒は、縄文時代中期の終わりごろに、磨消縄文の土器や打ち欠き石錘、石囲炉、隅丸方形の住居などと一緒に西日本へと伝播してくる。このころ東日本では遺跡の数が激減し、寒冷化したともいわれている。逆に西日本では遺跡の数が増えていく。東日本の遺跡は、火山灰台地や河岸段丘に立地する遺跡が多いのに対し、西日本では沖積平野に立地する遺跡が多いという違いがある。この沖積平野は弥生時代以降人々の活動が顕著となる場所であるから、西日本の縄文時代中期末は、時代区分をこえて歴史を長く俯瞰すると、画期的な時代であったと評価できる。

縄文時代中期末から後期前葉にかけては、大型でやや粗い作りの石棒(大型石棒)が、中四国地方の東半くらいまで伝播していく。この大型石棒は、その後目立たなくなるが、縄文時代晩期末まで継続していく。その後、縄文時代後期の中ごろから小型できれいに磨きあげた石棒(小型石棒)がみられるようになる。縄文時代後期後半から縄文時代晩期前半には、小型石棒に刃部を持つものが現れる(刀剣形石製品)。刀剣形石製品には石剣・石刀の2種類があって、北海道から中部・関東地方に石剣、中部地方から近畿地方に石刀がおもに分布する(後藤 1986・1987)。縄文時代晩期後半になると、関東地方以北で上記石棒類はほとんど姿を消していくが、中部・北陸地方西部から中国・四国地方東部までの地域で、おもに大型石棒の隆盛をみるようになる。これが縄文時代における石棒の最後の隆盛である。

四国の大型石棒で注意されるのは、山間部まで運ばれていったとみられるところである。神山町鍋岩、勝浦町三溪、那賀町(旧木頭村)北川(図1-1)といったものはいずれも山間部出土のものである。三溪や北川の石棒は、結晶片岩製であるから、県北部地域から運ばれていった可能性が高い。後世に運ばれた可能性も捨てきれないが、中世の青石製板碑など、後世の祭祀具に、木頭までわざわざ運んだ形跡はみられない。那賀町では、縄文時代の遺跡から香川県金山産のサヌカイトや大分県姫島産の黒曜石など、遠隔地との交易を示す資料が出土しており(高島ほか 1995、高島 2002・2009)、山を通じた交易が古くから存在していた可能性がある。近年愛媛県久万高原町で、標高 800m を超えるような縄文時代後晩期の遺跡が見つかってきており(柴田・遠部 2017・2018)、徳島県にも山を通じた交易を支えた遺跡が存在していた可能性が考えられるが、これらの解明は今後の調査

と研究の深化にゆだねなければならない。

四国の石棒は、ほとんどが結晶片岩製である。香川県、高知県、愛媛県南部、徳島県南部で結晶片岩は存在しないから、徳島県北部と愛媛県北部が製作の中心であったと考えられる。結晶片岩製の石棒は、縄文時代中期末から晩期前半までは四国島外へ持ち出されることは少ないが、縄文時代晩期末になると、山陰地方をはじめ遠隔地へと運ばれていった(図3)。

2. 石棒の終焉

近年、弥生時代集落から出土する石棒類を重視してこれを縄文文化の残存として評価する研究が注目を浴びている(秋山2002a・b・2004、寺前2005・2009・2010・2017)。しかし、筆者は以前からこれに疑問を呈してきた(中村2004・2014など)。

弥生時代の遺跡から石棒が出土する事例は戦前(末永・小林・藤岡1943)から知られていたが、戦後の考古学界では、これを報告・指摘してきた小林行雄氏(1959a・b)や佐原真氏(1975)をはじめ積極的な評価をしてこなかった。弥生時代の集落は、集落周辺の環境資源を有効に活用してきた縄文時代の集落とは異なって、大溝(環濠)や灌漑用水路を掘削し、1万㎡を超越するような水田を造成するなど、自然地形の改変をともなう土木開発工事を積極的におこなう特性を持っている。西日本では、縄文時代中期末から沖積平野に集落を営んで、儀礼と祭祀に石棒を利用してきた。弥生時代の集落は、縄文時代中期末以降の集落と立地が重なるので、土木工事に際して縄文時代の遺跡を壊してしまう可能性が高い。これらが弥生時代の遺跡に混入することがある。また、石棒は縄文時代の文物でもとくに目を引くようなかたちをしているため、弥生時代の集落で縄文時代から変容した農耕にともなう祭祀に再利用されたと推察される。那賀町(旧木頭村)北川八幡神社に祀られている石棒(図1-1)は、江戸時代後期に掘り出され、祭祀具として再利用されたものである。このような、時代に応じた儀礼・祭祀に石棒が再利用される端緒は、弥生時代前期の集落にあったと想定できる。すなわち、弥生時代遺跡から出土する縄文時代と同型式の石棒は、縄文時代遺跡からの混入や、農耕祭祀へと変容を遂げていった弥生時代独自の祭祀に再利用されたとみとくのが妥当である。弥生時代に作られた、縄文時代とは型式の異なる石棒類似品は、男茎形石根(国分1970)や男根形石製品(金関1976)と呼称し、また弥生時代以降の石剣は、磨製石剣(小林1959b)と呼称してきた。いずれも大陸系祭祀と融合して弥生時代独自の発展を遂げた祭祀具と想定するところからくる措置である。以上をふまえて、縄文時代の最後を飾るのは、三谷遺跡(図2)から多くのものが出土し、近畿地方から中四国地方東部一体へと運ばれていった結晶片岩製の大型石棒を用いた祭祀(図3、中村1998・2000b・2001・2004・2005・2007・2009・2012・2013・2014など)ということになる。

3. 四国地域における石棒の展開

四国地域における大型石棒と刀剣形石製品の展開を概観する(図1、中村2000a・2003・2014など)。

大型石棒は、縄文時代中期末から後期前葉にかけて東日本より四国地域にもたらされる。徳島市矢野遺跡では6点出土(図1-4)し、つるぎ町貞光前田遺跡(図1-2)や、香川県中村遺跡に類例が認められる。石材はすべて結晶片岩であるが、高知県田村遺跡にみられる砂岩製も、この時期の可能性が高い。

縄文時代後期中ごろから晩期中葉にかけては、大型石棒にくわえて、小型石棒や石刀といった精製の刀剣形石製品がみられるようになる。刀剣形石製品には島根県原田遺跡や、山口県岩田遺跡、広島県帝釈寄倉岩陰遺跡、岡山県舟津原遺跡、久田原遺跡のほか、高知県中村貝塚や東みよし町稲持遺跡(図1-5)、海陽町大里浜崎遺跡(図1-6)などがある。一方高知県大宮・宮崎遺跡や徳島市庄遺跡(図1-5)、愛媛県池の内遺跡、岡山県大森遺跡など、結晶片岩製の大型石棒も出土しており前代より継続していった様相がうかがえる。

縄文晩期後葉から縄文/弥生移行期には大型石棒が隆盛する(図2・3)。島根県大蔭遺跡、三田谷I遺跡、森I遺跡、原田遺跡、板屋III遺跡、門遺跡、蔵小路西遺跡、鳥取県智頭枕田遺跡、本高

弓ノ木遺跡、青木遺跡、長砂第3遺跡、岡山県百間川沢田遺跡、津島岡大遺跡、門田貝塚、徳島市三谷遺跡(図2)、名東遺跡、上中筋遺跡、大柿遺跡、香川県東中筋遺跡、井手東Ⅱ遺跡、龍川五条遺跡、下川津遺跡、愛媛県中寺州尾遺跡、阿方遺跡(報文では敲石)、上郷遺跡、船ヶ谷遺跡、北井門遺跡、道後今市遺跡、高知県居徳遺跡、仁ノ遺跡、田村遺跡などで出土している。この時期の特徴は、石材は一部が地元産で、結晶片岩製のものが広域分布ところにある。三田谷Ⅰ遺跡例は原産地の検討もおこなわれ、四国三波川帯産と推定されている。結晶片岩自体は中国山地でも産出するが、この特徴的な結晶片岩は、四国山地に多くみられる高変成度のものを特徴としており、中国山地ではみられないものである(高須2000)。

以上なかでも特筆すべきは三谷遺跡で、未製品(図2-1・2)や大型の個体(図2-3~8)がまとまって出土し、出土点数自体も飛び抜けて多い。当該期の結晶片岩製石棒のうち、かなりのものはここで生産され、運ばれていったものとかんがえられる。海を介して、大阪湾や紀伊水道沿岸諸地域を含む瀬戸内海沿岸地域に波及したと考えられる。さらに、山陰地域の結晶片岩製石棒は、津和野・奥出雲・飯南・智頭といった内陸部での出土例が多い。山口県の沿岸部の遺跡でみられないことからみて、これらは中国山地を介して伝えられていったことを示唆している(図3)。

結晶片岩製石棒は、この時期中国四国地域だけではなく関西地域にも波及していることが知られている。大阪湾沿岸から紀伊水道沿岸地方(大阪・兵庫・和歌山諸県域)では、多くの類例が蓄積されている。また内陸の奈良(橿原市橿原遺跡、大和高田市川西根成柿遺跡、御所市中西遺跡など)・京都(京都市高倉宮下層遺跡)・滋賀(大津市滋賀里遺跡、高島市北仰西海道遺跡、米原市磯山城遺跡)でも多くの類例が報告されている(図3)。

西日本で特定石材の石棒がこれだけの分布圏をもち、かつ石棒祭祀がこれだけ盛行したのは、縄文時代晩期末だけである。同時代の日本列島で、もっとも多く石棒がもちいられたのは、縄文時代史でも特筆すべき事実であり、この背後に縄文時代から弥生時代への移行という重要な歴史的転換点が位置している。

4. 縄文時代晩期末(縄文/弥生移行期)における石棒隆盛のもつ意味

縄文時代晩期末(縄文/弥生移行期)、中国四国東部地域で盛行する大型石棒に対し、九州北部~四国西部地域を中心に大陸系の精神文化がもたらされる。その代表的な遺物は、有柄式磨製石剣である(下條1994、武末1982)。有柄式磨製石剣は、愛媛県内や田村遺跡、高松市庵治町海底などで出土し、分布状況は四国西部地域に偏りをみせており、中国・四国地方東部と好対照をなしている(中村2004・2005・2014)。あらたに伝播してきた大陸系の精神文化との出会いが、中国・四国地方東部における伝統的な精神文化の盛行を促したものとかがえられる(図3)。

大型石棒は、灌漑水田稲作が拡大するとともに、その役割を終える。近年、石棒祭祀と青銅器祭祀との地域性に共通点のあることが指摘され、祭祀の地域色が、縄文から弥生へと継続する可能性についての言及もみられるようになってきた。

難波洋三氏は、菱環鈕式銅鐸と外縁付鈕Ⅰ式銅鐸といった、古式の銅鐸の分布が、特定の中心地に集中するのではなく、すでに東海・北陸西部~中国四国東部といった、広域にみられることから、銅鐸祭祀成立以前に、銅鐸祭祀に継承されていくなんらかの共通の祭祀によって、まとまった地域圏をすでに形成していた可能性を指摘している(難波2000・2004)。

筆者は縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭に展開する結晶片岩製石棒の分布圏が近畿から中国四国東部に展開することを指摘し、同時代の北部九州から中国四国西部に大陸系の祭祀具である有柄式磨製石剣が展開し、列島西部を東西に二分した祭祀具の分布圏がみられることを見出した(中村2004)。また、難波氏の研究を受けて、これがのちの銅鐸と武器形の青銅製祭器の分布に類似していることを指摘し、この両者の関連性を予察した。

近年、茨木市東奈良遺跡出土の小銅鐸が、一つしかない型持ち孔や鈕の断面形態、鱗がみられないなどの朝鮮式小銅鐸との類似性から、菱環鈕式銅鐸をさかのぼり最古に位置づけられるという意見がある(森田2002)。さらに、その文様が三田谷遺跡や三谷遺跡にみられるような有文土器や北

陸地方や中部地方にみられる浮線渦巻文土器などの文様と類似している点が指摘されてきている(図4、設楽 2009・2013・2014)。菱環鈕式銅鐸の製作が弥生時代前期後葉から弥生時代中期初頭であり、東奈良の小銅鐸がこれをさかのぼる弥生前期中葉の製作と想定できるのであれば、大型石棒祭祀の終焉と銅鐸祭祀の起源とのあいだに、あまり断絶はないのである。

まとめ

中四国地方では、縄文中期末・後期初頭～後期前葉に大型石棒を東方より導入する。

縄文後期中葉から晩期中葉にかけては刀剣形石製品が展開するようになる一方で、大型石棒も継続する。

縄文晩期後葉(縄文/弥生移行期)には大型石棒が広く展開した。石棒の出土点数は多く、近畿地方も含めると、同時代の日本列島でもっとも隆盛する。結晶片岩製のものが、三谷遺跡を中心に多量に生産され、各地にもたらされる。この背景には、北部九州から中四国西部において、有柄式磨製石剣にみられるような大陸系の精神文化が展開しつつあったからである。

引用参考文献

- 秋山浩三 2002a 「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』
- 秋山浩三 2002b 「弥生の石棒」『日本考古学』14
- 秋山浩三 2004 「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」『考古論集-河瀬正利先生退官記念論文集-』
- 勝浦康守編 1997 『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 金関 恕 1976 「弥生時代の宗教」『宗教研究』49-3
- 国分直一 1970 『日本民族文化の研究』慶友社
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究 上」『考古学研究』33-3
- 後藤信祐 1987 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究 下」『考古学研究』33-4
- 小林勝美 1995 「海南町出土の石器」『海南町史』
- 小林行雄 1959a 「せき-ぼう」『図解考古学辞典』東京創元社
- 小林行雄 1959b 「せつ-けん」『図解考古学辞典』東京創元社
- 佐原 真 1975 「農業の開始と階級社会の形成」『新版岩波講座日本歴史1 原始および古代1』岩波書店
- 設楽博己 2009 「弥生開始期の社会変動-東海・関東地方の場合-」『季刊東北学』19
- 設楽博己 2013 「東奈良銅鐸の文様をめぐって」『三島弥生文化の黎明 -安満遺跡の探求-』高槻市立今城塚古代歴史館
- 設楽博己 2014 「銅鐸文様の起源」『東京大学考古学研究室研究紀要』28
- 柴田昌児・遠部 慎 2017 『猿楽遺跡-山稜の弥生集落確認調査概要報告書-』久万高原町教育委員会
- 柴田昌児・遠部 慎 2018 『猿楽遺跡2次調査-山稜の弥生集落確認調査概要報告書2-』久万高原町教育委員会
- 下條信行 1994 「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『「社会科」学研究』28
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙次郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 16
- 高島芳弘ほか 1995 「徳島県那賀川流域における縄文遺跡の分布とその遺物」『徳島県立博物館研究報告』5
- 高島芳弘 2002 「那賀川流域における縄文時代の石器石材について」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 高島芳弘 2009 「東四国の姫島産黒曜石」『考古学の源流-木村剛朗さん追悼論集-』木村剛朗さん追悼論集刊行会
- 高須 晃 2000 「三田谷 I 遺跡より出土した石器石材の岩石学的研究と原産地の推定」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX 三田谷 I 遺跡3』島根県教育委員会
- 武末純一 1982 「有柄式石剣」『末廬国』六興出版
- 寺前直人 2005 「弥生時代における石棒の継続と変質」『待兼山考古学論集-都出比呂志先生退任記念-』

- 寺前直人 2009 「武威と社会形成」『弥生時代の考古学6 弥生社会のハードウェア』同成社
- 寺前直人 2010 『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 寺前直人 2017 『文明に抗した弥生の人びと』吉川弘文館
- 泊 強編 2001 『貞光前田遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 35
- 中村 豊 1998 「稲作のはじまり-吉野川下流域を中心に-」『川と人間-吉野川流域史-』溪水社
- 中村 豊 2000a 「四国地域（徳島県・香川県・愛媛県・高知県）の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』科学研究費報告書
- 中村 豊 2000b 「近畿・東部瀬戸内地域における結晶片岩製石棒の生産と流通」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』科学研究費報告書
- 中村 豊 2001 「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉-縄文から弥生-」『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』科学研究費報告書
- 中村 豊 2003 「四国地域の石棒・石刀」『立命館大学考古学論集Ⅲ』
- 中村 豊 2004 「結晶片岩製石棒と有柄式磨製石剣」『季刊考古学』86 雄山閣
- 中村 豊 2005 「列島西部における石棒の終末-縄文晩期後半における東西交流の一断面-」『縄文時代』第16号
- 中村 豊 2007 「縄文-弥生移行期の大型石棒祭祀」『縄文時代の考古学11 心と信仰-宗教的観念と社会秩序-』同成社
- 中村 豊 2009 「石棒を通してみた縄文から弥生への地域社会の変容」『一山 典還暦記念論集 考古学と地域文化』
- 中村 豊 2012 「中四国地域における大形石棒」『考古学リーダー20 縄文人の石神-大形石棒にみる祭儀行為-』六一書房
- 中村 豊 2013 「結晶片岩製石棒の拡散」『農耕社会成立期の山陰地方』山陰考古学研究集会
- 中村 豊 2014 「中四国における縄文時代精神文化について-大型石棒・刀剣形石製品を中心に-」『山陰地方の縄文社会』島根県古代文化センター研究論集13
- 難波洋三 2000 「同範銅鐸の展開」『シルクロード学研究叢書』3
- 難波洋三 2004 「銅鐸と銅鐸祭祀の変遷」『國學院大學21世紀COE 考古学・神道ミニ・シンポジウム 日本列島における青銅器祭祀』（難波洋三 2007 『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』科学研究費報告書に再録）
- 藤川智之・氏家敏之・湯浅利彦ほか 2003 『矢野遺跡（Ⅱ）（縄文時代篇）』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書44
- 前川直江編 1997 『庄遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書21
- 森田克行 2002 「最古の銅鐸をめぐって-東奈良銅鐸の型式学的検討-」『究班2-埋蔵文化財研究会25周年記念論文集-』埋蔵文化財研究会
- 湯浅利彦 1993 「阿波の縄文人-稲持遺跡を素材として-」『鳴門史学』7

挿図出典

- 図1-1 中村 2003、図1-2 泊編 2001、図1-3 前川編 1997、図1-4 藤川ほか 2003、図1-5 湯浅 1993、図1-6 小林 1995
- 図2 勝浦編 1997
- 図3 中村 2014（有柄式磨製石剣の分布は、武末 1982 を参照）
- 図4 設楽 2013

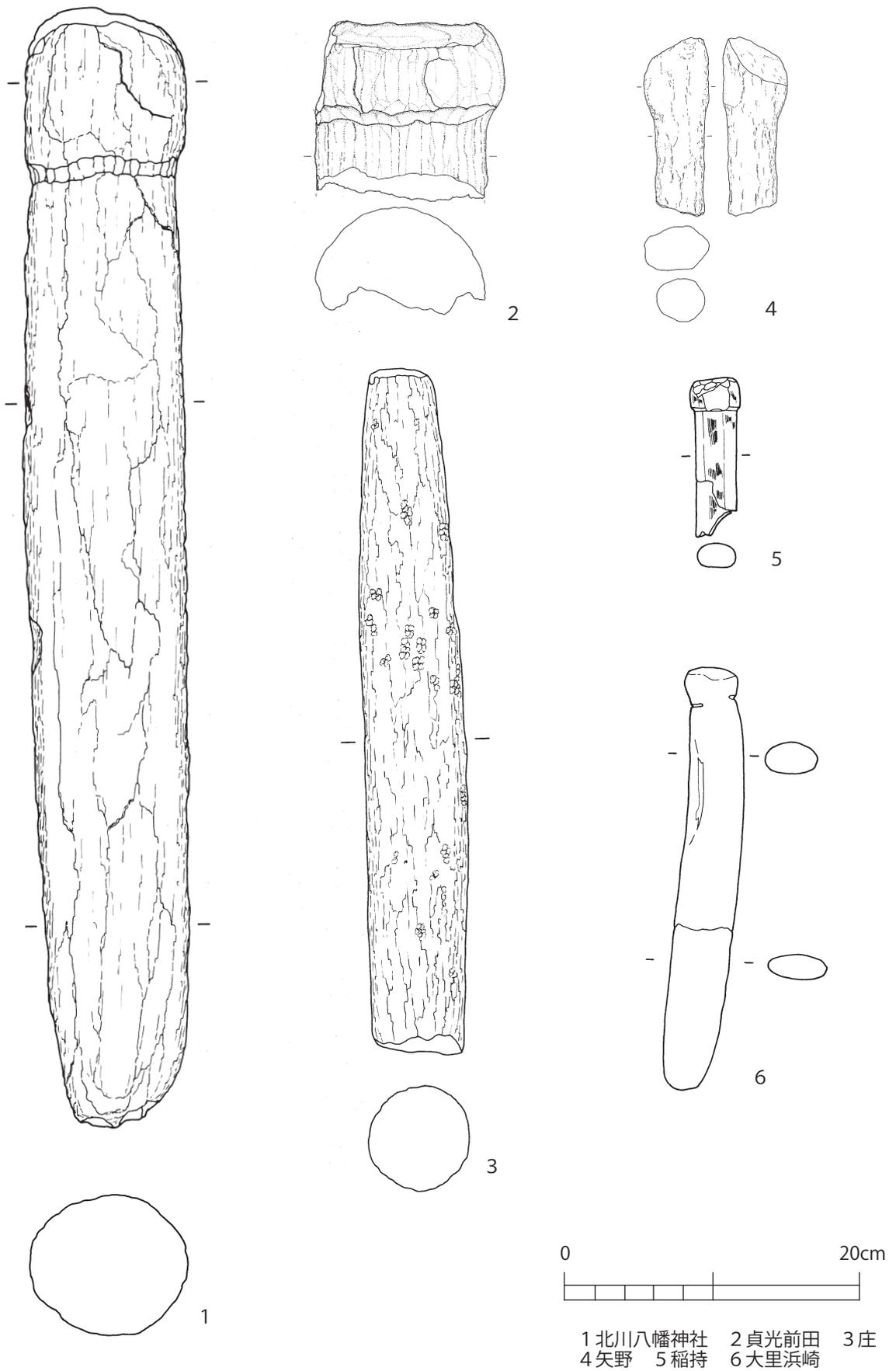


図1 徳島県出土石棒（縄文時代中期末から縄文時代晚期前半）

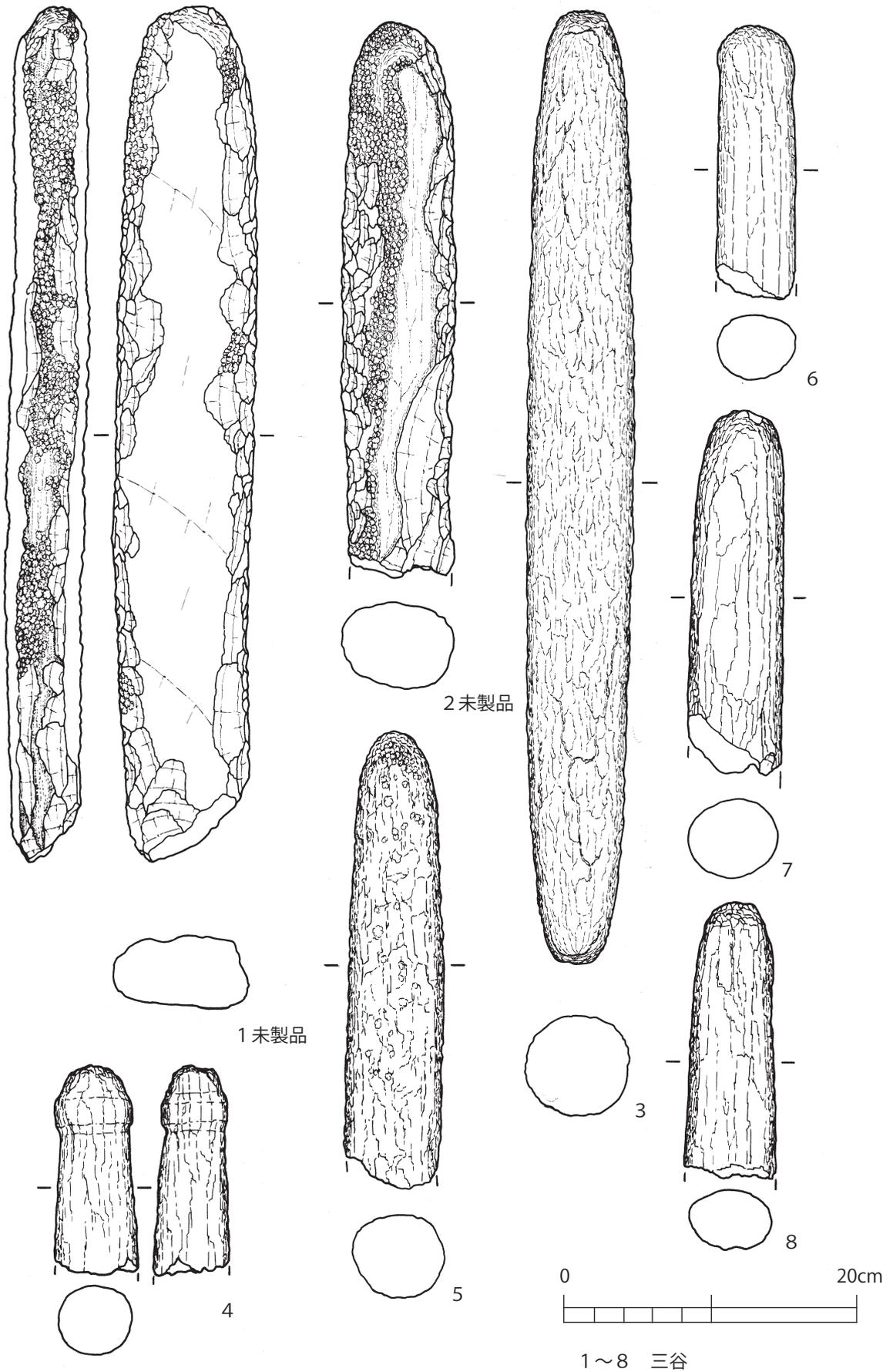


図2 三谷遺跡出土石棒（縄文時代晩期末〔縄文／弥生移行期〕）

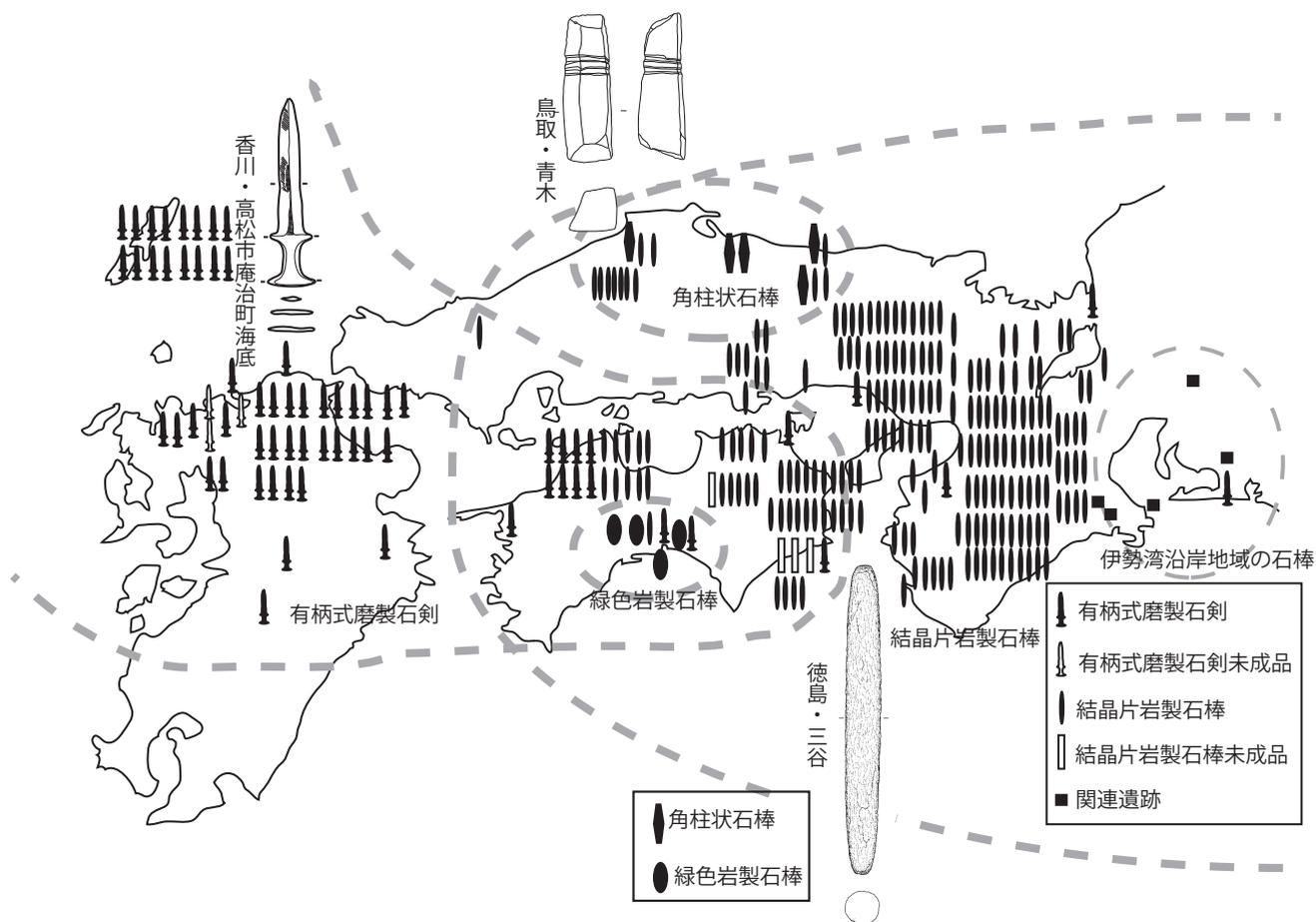


図3 西日本における縄文時代晩期末〔縄文／弥生移行期〕の石製呪術具の分布

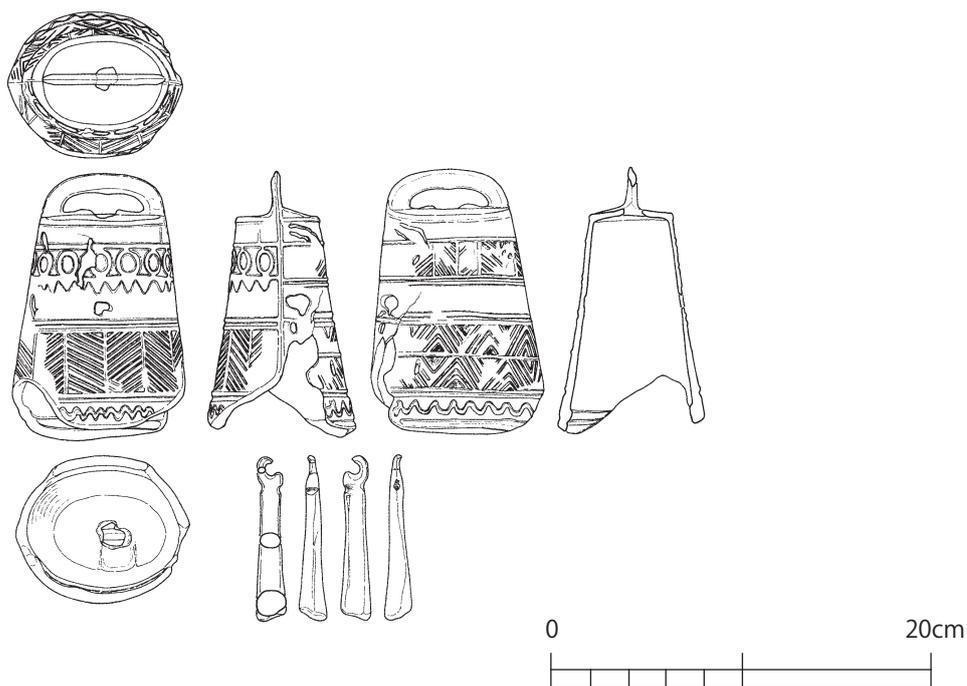


図4 茨木市東奈良遺跡出土銅鐸